

## エマソン : エマソン・エッセイ集の翻訳について (一九〇三年)

カスナー, ルードルフ

小黑, 康正

九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1650974>

---

出版情報 : 文學研究. 113, pp.1-10, 2016-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# エマソン

エマソン・エッセイ集の翻訳について（一九〇三年）

ルードルフ・カスナー 著

小 黒 康 正 訳

実に卓越した言葉使いの持ち主であるエマソンを読めない者は少なくない。デーデリッヒス社は<sup>1</sup>最良のエッセイ集の優れたドイツ語訳を出したことで、多くの者から感謝を受けるであろう。同社にしても、偉大なアメリカ人のまさにドイツ語訳刊行を凌ぐ見事で有益な取り組みを示すことはできなかったのである。

ラルフ・ウォルドー・エマソン（一八〇三—一八八二年）はヨーロッパの素材すべてを、まさしくすべてを受け入れ、何ひとつ逃さなかったが、しかしすべてをまったく新しいものとしてヨーロッパに再び返したのである。エマソンはこちらでは既に古くなり、力を失い、形式を欠いてしまっていた多くのものを受け入れ、それらを再び若返らせて、花を咲かせた。すべてを受け入れ、何ひとつ逃さなかったが、すべてを受け入れ、何ひとつ逃さなかったからこそ、彼は大学教授たちによってとかく名づけられがちな折衷主義者ではなかったのである。折衷主義者は必ずしもすべてを選び出して取りあげるわけではなく、折衷主義者には隠された裏の意図があり、自らの自尊心に適うものを我がものとし、自らの信念と相容れないものを逃す（というのも折衷主義者が何らかの信

念をもって始めるのは、自由に振る舞うためだからだ。折衷主義者は必ずしも実際の役に立たない理論家ではないが、しかし完全に何か不純で、形式を欠くものであり、純血ではない。私たちは折衷主義者に対してえてはかなり寛大である。なぜならば、哲学者の内に芸術家を認めることは、厳密に言えば、私たちにとって相変わらず難しすぎるが、厳密に言わないとなると、易しすぎることになるからだ。折衷主義者ともなればいかなる場合でも不必要で忌まわしく、素材から作り出す芸術家では決してなく、常に器用な料理人にすぎない。ソクラテスは、ソフィストに対して、芸術家と料理人の区別をこのように好んで行った<sup>(2)</sup>。実際のところ、現代の折衷主義者とソフィストの関係は、エマソンの言う人間、つまり、個性である常に新しい人間とプラトンの言う人間との関係に等しい。折衷主義者は、個性をもつソフィスト、個人としてのソフィストであり、ソフィストと比べて単調であり、我が強いただけにすぎない。昔のソフィストにおいて一番よい点は、金で買えるということだ。現代のソフィストは残念ながらもはや金で意のままにならず、それどころか憂いに沈んでいることがよくある。買収できるのであれば、その者に対する我々の態度表明はかなり容易になるであろう、と私は思う。現代のソフィストは内面では非常に我が強く、いやそれどころか、既に述べたとおり、憂いに沈んでおり、ただ外面において如才が無いだけにすぎない。エマソンは我が強くなく、実際にモンテーニュ（一五三三—一五九二年）とパスカル（一六三三—一六六二年）とを同じ程度に愛したのだが、他方またこうした愛は単なる好奇心以上のもので、すでに信念を持った者の嗜好であった。エマソンの感受性は偉大なる歓喜と美德であり、エマソンは自身があるとき述べている天才に見られる完璧な受動性をかなりはつきりと有していたのである<sup>(3)</sup>。エマソンは芸術家的な存在だった。さまざまな人々の考えをすべて愛したが、それも素材として、光として、自然の光として、激しく燃え上がる火として愛したのである。

実際にアメリカ人、それも十九世紀の人間となると、必ずこうならざるを得なかったのかもしれない。つまり

ここでは、カント以後の者として、非の打ちどころがなく受け取るすべを心得ているあまり、贈り手に恥知らずな裏切りなどしない者のことを言う。体系の争いにことごとく縁遠く、ただ人間だけを、ただ人間を情熱的に欲した者に違いなかった。折衷主義者は、大抵の場合、臆病風を吹かせて争いからこっそりと抜け出して、背中に傷を負う者たちだ。それにアメリカ人となると、あまりに实际的すぎて、長期の争いはできない。つまり宗教紛争はすべて（それは結局、もしくは密かに、アメリカ人の哲学紛争でもあるのだが）新しい宗派の形成とともに直ちに終わってしまう。宗派形成はアメリカだと際限がない。エマソンの祖先は皆、とにかく意識していたにせよ、していなかったにせよ、ある宗派の信奉者であり、孫の段となると「どの人間も新しい宗派である」と口外するまでになった。エマソンがそのようなことを言ったのかどうか私には分からないが、おそらく発言はあり得ただろう。そうした発言は矛盾しているように聞こえる。しかし、エマソンは（内心では）かなり前から異議を申し立てていたが、ついには発言をひっくり返して、「すべては、君の内で君自身を通じて一つのものとして息づく限り、真実である」と述べるまでになった。エマソンの個人主義は、彼のプロテスタンティズムの、その改心の最終的な非の打ちどころのない現れであり、宗派文化の結果である。エマソンは教会記録簿にユニテリアン派（三位一体説に異を唱えたキリスト教の宗派）の信者として登録された。最終的には、非哲学的なアメリカ人にとって、感情が特定の教義を求めない限り、ユニテリアン派の信者になるより他はない。しかし、宗教人として非常に漠然としたものに留まらざるを得ないユニテリアン派の信者を、エマソンは哲学に向かわせ、信者の熱狂に形式を、文言に音楽をもたらしただのである。

しかも必ずこうなるのが、先に述べたことだが、後から生まれてきた者、カントの真の後裔である。というのも、カントは懐疑主義も折衷主義もまったく同じように取り除いたからである。カント以前だと折衷主義は道德的告白という価値をいまだ有し、そもそもまだ影響力があったであろうが、カント以後はすっかり非哲学的にな

り、無価値で、まさしく無趣味であるように私には思えてしまう。更に言うと、カントが熱狂者たちからすべてを取り去ったとしても、カントは自分の真の後裔たちに驚きを、それも失われてしまったかのように見えながらも、折衷主義者たちのベテンでは決して埋め合わせることができない驚きを再び返したし、しかも（引き続き）語るのである。それもいずれの思想もすでに形式として、形式において受け取り、それだけにかんりの意味合いで不安も、憂いも、悲嘆もなく生きるすべての者たちに向かつて、とりわけ生き生きと語るのだ。常に不安も、憂いも、悲嘆もないまま、自分の思想に汲めども尽きせぬ喜びを寄せていたことは、私にとつてエマソンにおける偉大さである。彼は決して停滞することも、行き詰まることもなかった（それにもかかわらず一度たりとも避けることはなかったのである）。ヨーロッパの折衷主義者は（私は名前を挙げない。挙げるに紛糾をもたらずからだ）あれかこれかに、内容か形式かに常に窮し煩うので、いつまでも苦しんでいるか断固たるかで、同時に両方であることも多く、教訓的であるかひどい詩人であるので、感情に見境がなく、アレゴリー的なのだ。折衷主義者は哲学における永遠のパロックであり、エマソンは象徴主義者である。私は象徴主義者という言葉を、それが呼び覚ますいくつかの耐え難いイメージゆえに特別好むわけではないが、しかしここではそう述べておこう。パロックは気に入られることもあれば、気に入られないこともある（その流儀はいずれにせよ妥協にすぎない）。象徴主義は、結局、ただの徹底的な生成、つまり精神化と肉体化にすぎないのである。エマソンにとって、精神化と肉体化とはまったく同じものだった。それゆえエマソンは象徴主義者だった、と私は言うのだ。

しかし、エマソンは折衷主義者ではないばかりか、それどころか折衷主義の克服である。エマソンも確かに選択を行ったが、好んで最後にあるものを選んだ。エマソンがスピノザ（一六三二—一六七七）の『エチカ』の中で最後の部分だけを好んで読み、プラトンの『国家』よりもプロティノス（二〇五頃—二七〇頃、新プラトン派の創始者）の『エンネアデス』を、少なくともかなり特定の箇所、例えば第四論文を好んだ、と私は確信している。

さらに同様の確信によると、エマソンの場合、シェリング〔一七七五—一八五四〕に対する思いはまんざら悪くはなかったようで、カントについては距離を置いて考えることを好んだ。似たような傾向は危険であり、公に育まれてはならない。学派が必要不可欠とされる限り、最初にプラトン、それからプロティノス云々と常に記されなければならぬであろう。それはバロックを避けるためである。なにせ最高のものをいたずらに持ちたがる安っぽい頭脳の持ち主に、おそらくバロックはいつであれ気に入られるからだ。学派の者はプロティノスからプラトンへと逆推論ができないし、プロティノスという最後の人物にとらわれてしまう。そうなることで学派の者だと見抜かれるのかもしれない。天才にして大家であり、完全と統一を求める者は、逆の道を進み、いわば払い戻しをし、多様で比喩的なものから単純なものへと移ることが許されている。なぜならば天才だけが単純なものの中で多様なものをも味わうすべを知っているからだ。このことはまた、デカダンスという言葉が天才にしてみればいかなる意味も失ってしまう理由となる。つまり、天才は事物を何度もひっくり返すが、言葉にかまけて安心して不安になったりはしないのだ。天才は自然に反してもよい。天才にとってすべてが自然になるからだ。詰まるところ、エマソンは巧緻精妙を理由としてではなく、相変わらず人間を、それも人間だけを求めたという理由から、ありとあらゆる最後のもの、類いまれなものを愛した。エマソンの思想をかように人間に理解させた者は誰もいなかった。この場合、人間は求めさえすればよいかのである。エマソンは偉大な才能の、美しく、高貴な人間に出会うたびに、毎度、自身の全哲学を再び忘れてしまったが、言い換えると、自身の全哲学をそうした人間の内にすっかりと認め、そうした人間にもたらし、何も手元に残しておかなかったのである。エマソンは哲学を、唯一の満たされた感情と同じように、常に心に留めておかなければならなかった。私はこう言いたい。それぞれの人間がエマソンを繰り返し彼の哲学から解放した。その哲学はいずれの瞬間においても円熟していたのだ。人間にしか、瞬間に生きる人間にしかエマソンの哲学を正しいと認めることができず、エマソンは人間を、

瞬間に生きる人間を待っていた。エマソンは常に師であると同時に弟子であり、人間の師であり、人間の弟子であったのだと。

エマソンにはまったく規律がなかった。そのことは私にとって確かに間違いないが、エマソンは自分の哲学を常に丸ごと、いわば一文で言い表したのだ。ソクラテスの場合、規律が盛り沢山あり、アテネの者たちにすれば、繰り返し最初に規律ありきだったが、最後にソクラテスはただ一言しか言わず、問いをひとつしか立てなかったことが多い。エマソンの場合、規律は取るに足らないものだった。だが、もう一度言うくと、エマソンはすべてを、一度にすべてを出して、自分自身のためには瞬間しか、驚きしか取っておかなかったのだ。すべてを自分自身の中から人間の中へと投げ出したのである。規律はエマソンにとって人生そのものの中にあり、たとえ早かろうが遅かろうが、隠されていようがなかろうが、名声のように単純であろうが運命のように多様であろうが、それぞれの人生にあった。エマソンはすべてを人間に与え、それ故にまた人間にすべてを要求したのである。

彼は最後を好んで選んだ。なぜならばまさに最後によって速やかに、いやそれどころか直接的に最初に、素朴に連れ戻されたからである。エマソンは神秘主義者だった。それは、艱難や熟慮によるものではなく、彼が素朴を好んだからである。もし折衷主義者が選択しなければならず、友人たちに好んで言っていることとは違って「見解の相違」が偶然でないのであれば、当然のことながらインド人を選ぶであろう。これに対してエマソンは、自身の偉大なる瞬間において、我知らずにインド人に同調する。エマソンの思想は、結局、人間や自然に対する彼らの完全な直接性を示す。そうなるといかなる艱難も熟慮もエマソンをもはや人間と自然から分け隔てることはない。何か完全に特定のものを立証しようとしたから、エマソンが分かりやすかったのではない。そうではなく、彼の分かりやすさは直接性であり、詩人や神秘主義者の分かりやすさであり、絵に描かれた光のようで、あの風景や人間の顔の分かりやすさであり、言葉や事物の終わりにではなく、言葉と言葉の間、事物と事物の間に

あった。彼の分かりやすさは音楽の分かりやすさであり、芝居の分かりやすさであり、魔術の分かりやすさであったのである。

訳者注（比較的短い注に関しては、「」を付して本文中に組み込んでいる。翻訳底本の訳注は適宜参考にした。）

- (1) オイゲン・ディーデリッヒスによって一八九六年に設立された出版社。文学・哲学書の刊行を数多く手がけた。
- (2) プラトンは『ゴルギアス』中の数カ所 (462D-463B, 500B-E) で、弁論術は料理と同様に技術 (techné) ではなく、経験や熟練にすぎないと主張している。
- (3) エマソンのエッセイ『詩人』に当該の記述がある。Vgl. R. W. Emersons „The Poet“ (Essays Second Series, I, in: The Complete Works of R. W. Emerson, 1903, Vol. III, p. 1-42.)

#### 翻訳底本

Rudolf Kassner: Emerson. Zu einer Übersetzung seiner Essays. (1903) In: ders.: Sämtliche Werke. Bd. II. Im Auftrag der Rudolf Kassner Gesellschaft herausgegeben von Ernst Zinn und Klaus E. Bohnenkamp. Stuttgart: Klett-Cotta 2001, S. 131-136.

#### 訳者後記

ルードルフ・カスナー（一八七三—一九五九年）は本訳出の「エマソン」を雑誌『新展望』Die neue Rundschau 一九〇四年十二月号で公にした。この文章は、副題が示すとおり、ドイツ語版『エマソン全集 全五巻』に対する書評である。同全集は、ヴィルヘルム・シェーラーマン、ハインリヒ・コンラート、ヴィルヘルム・ミースナーの共訳で、一九〇二年から一九〇四年にかけてライプツィヒならびにイエナのオイゲン・ディーデリッヒス社から刊行された。「エマソン」は、その後、一九〇六年五月にベルリンのフィッシャー社から出された『モティーヴェ』Motiveに掲載される。なお、副題にある「一九〇三年」という年号は、すでに初出の一年前に同エッセイが書かれたことを示す。



カスナーの『モティーヴェ』は、ジェルジ・ルカーチの『魂と形式』（一九一一年）が示すとおり、ヨーロッパ文学における新たなエッセイの展開を決定づけた。初期カスナーの代表作には、次のようなエッセイ八本が所収されている。

- 一 「セーレン・キルケゴール 箴言風に」（拙訳、九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第二十七号、二〇一三年、一―四七頁）
- 二 「ロダンの彫刻に関する覚書」（拙訳、九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第二十九号、二〇一五年、掲載決定済み）
- 三 「絨毯の倫理」（拙訳、九州大学大学院人文科学研究『文学研究』第百十一号、二〇一四年、六七―八二頁）
- 四 「アベ・ガリアーニ」（拙訳、九州大学大学院人文科学研究『文学研究』第百十二号、二〇一五年、一―一六頁）
- 五 「ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット」（拙訳、九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第二十八号、二〇一四年、一―二二頁）
- 六 「エマソン」（本訳出）
- 七 「ボードレール」（既訳なし）
- 八 「ヘッベル」（拙訳、九州大学大学院人文科学研究『文学研究』第百十号、二〇一三年、二九―五四頁）

「エマソン」は、八本のエッセイ中、二番目の「ロダンの彫刻に関する覚書」と並んで最も短い。加えて、他のエッセイと比べて異なる事情が二点ある。『モティーヴェ』に再掲載される際、他のエッセイはいずれも若干の加筆修正にとどまったのに対して、「エマソン」の場合、いろいろと手が加えられた。これを第一点とするならば、第二点は、他の七本が一九二三年発行の『エッセイ集』Essaysに収録されたが、「エマソン」のみが収録されなかったことにある。このような特殊な扱いを受けた「エマソン」ではあるが、しかしながら、『モティーヴェ』中の他エッセイと同様、新たなエッセイの心髄を明確に示している。以下、その点について説明しておこう。なお、今回の訳出は、初出の一九〇四年版ではなく、『モティーヴェ』に掲載された一九〇六年版に基づく。

「エマソン」は、キルケゴールやロダンに関するエッセイと同様に当時において先駆的な著述であり、単なる解説の域を超えて新たなエマソン観を示す。それを、ゲオルク・ジンメル『廢墟』（一九〇七年）の言葉を援用しながら、エマソンのように端的に言い表そうとするのであれば、「豊かで多彩な文化、無限の影響受容力、そして、デカダンスの時代に特有の、あらゆる方向に対して開かれた理解」（『ジンメル著作集七』、田子修平訳、白水社、一九七六年）となる。もつともこうした精神的な態度はとかく折衷主義として了解されるが、カスナーはエマソンを決して折衷主義者として見なさず、むしろ形式を欠く時代にお

ける折衷主義の克服と見なす。カスナーによって折衷主義者は、その受容能力ゆえ一見すると如才がないが、実は精神に偏りがあるだけに、憂いに沈むほど非常に我が強い。こうした態度がいびつな体系、いわば「哲学における永遠のパロック」しか生み出さないことを、カスナーは見逃さない。折衷主義者の偏った精神は「あらゆる方向に対して開かれた理解」も持たなければ、形式を欠く硬直した古いものを「再び若返らせて、花を咲かせた」こともない。ただ、古い哲学体系をめぐる無限の争いを繰り返すだけである。こうした精神的な態度に、エマソンは無縁であり、決して体系を志向することがない。むしろ人間を、「瞬間に生きる人間」を欲し、自らもそうした新しい人間になろうとしたのである。その際、人間そのものを、体系を通じて間接的に理解しようとしたのでなく、あくまでも直接的にまるごと理解しようとしたと言えよう。少なくともカスナーはそう捉えた。こうした方法的に非方法的なあり方は、従来の哲学からすれば、象徴主義であり、場合によっては神秘主義とも魔術とも称されよう。しかし、カスナーは敢えてこれらの言葉をエマソンに結びつけて肯定的に使っている。

エマソンは神秘主義者だった。「中略」彼の分かりやすさは直接性であり、詩人や神秘主義者の分かりやすさであり、絵に描かれた光のようで、ある風景や人間の顔の分かりやすさであり、言葉や事物の終わりにではなく、言葉と言葉の間、事物と事物の間にあつた。彼の分かりやすさは音楽の分かりやすさであり、芝居の分かりやすさであり、魔術の分かりやすさであつたのである。

それでは、エマソンが示した「直接性」「分かりやすさ」とは如何なるものであつたのだろうか。カスナーはエマソンが対象把握の際に示した「最後」に対する関心を見逃さない。なぜならばエマソンが、そしてエマソンの著作を読むカスナーが、「最後」を通じて「最初」にすぐさま連れ戻されるからである。こうした言及は、言うまでもなく体系でもなければ実証でもなく、あくまでもある種の特異な体験を述べているにすぎず、神秘主義者エマソンの内実を具体的に示しているわけではない。この点に「エマソン」のみが他のエッセイとは異なり一九二三年発行の『エッセイ集』に収録されなかつた所以があろう。前述のとおり、「エマソン」は『エマソン全集』に関する書評として書かれた。つまり、大きな全集に依拠した小さな文章として、いわば独立性に乏しい断片として書かれたのである。但し、カスナーが「エマソン」を通じて読者に読書体験を促している点を見逃してはならない。つまり、カスナーにすれば、読者が『エマソン全集』と「エマソン」の間に立ちながら、件の「分かりやすさ」を直接体験してもらいたいのである。

「エマソン」が所収された『モテューヴェ』<sup>モテューヴェ</sup>はいわば動因<sup>モテューヴェ</sup>であつた。「エマソン」を読む者は二重の意味で特定の「試み」<sup>モテューヴェ</sup>に促

されていると言えよう。一方で、読者は書評としての小エッセイを通じて『エマソン全集』という茫洋へと促され、ヨーロッパが失いかけている「魔術」を「まるごと」体験する。それは、徹視的に言えば読者が、巨視的に言えばヨーロッパが、硬直した生から脱し、「瞬間に生きる人間」として甦えようとする「試み」に他ならない。他方で「エマソン」は、大きな全集に依拠した小さな文章ではもはやなくなり、いわば独立したエッセイとして、読者を新たな芸術原理へと促す。「エマソン」が有する非方法的な方法は、『モティーヴェ』所収の他エッセイと同様、体系や実証を忌避しながら断片やアフォリズムを志向する。それは、新たなエッセイの「試み」として、体系によって構築された静的な「完成」ではなく、対象との「直接性」に基づく動的な「未完」をめざす。つまり、読者は「エマソン」によって「動くもの」へと二重に促されるのである。